

# 供給不足で相場上昇が続く和牛素牛の増頭へ 和牛の生産基盤を整備し、畜産振興

## ICTによる生産性向上やET技術を活用!

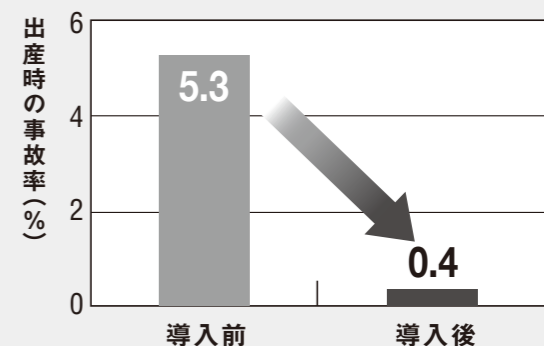
和牛素牛(子牛)生産者の高齢化は年々進み、繁殖農家戸数は減少の一途。そこへ平成22年の口蹄疫の大規模発生、平成23年の東日本大震災などにより、和牛の生産基盤が縮小しています。その結果、和牛素牛相場が上昇し続けており、肉牛肥育農家の経営に深刻な影響が生じています。JA全農は、こうした状況に対応するため、和牛素牛の「増頭対策」に取り組んでいます。

子牛の生産においては、出産時のトラブルで約5%が死産となってしまうことが知られており、これをいかに救ってあげるかが、大事な「増頭対策」となります。JA全農では、平成26年にIT企業と連携して牛の出産の兆候を監視するシステム「モバイル牛温恵」の取り扱いを開始。平成29年2月時点で、30頭以上の繁殖牛を飼養する繁殖農家の約2割にあたる約1200戸の農家が導入し、**出産時の子牛死亡事故を1%以下とするなどの成果**が上がってきました。

また、受精卵による和牛生産が近年盛んになっており、直近では和牛生産の約10%に達しています。**受精卵による和牛生産は、人工授精による和牛生産と比較して約21倍の増頭効果**があると言われており、和牛生産の柱として期待されています。そのため、旺盛な受精卵需要への対応としてJA全農ET研究所は、繁殖農家が所有する雌牛から受精卵を採取する「農家採卵」を開始し、さらなる受精卵供給数量の拡大をはかっていきます。

※ET:「Embryo Transfer」の略。受精卵移植の意。

■「モバイル牛温恵」導入による出産時の子牛死亡事故の低減効果



※JA全農調べ

全農が進める「たくましい農業づくり」をシリーズで紹介します。